



# 紀平真理子のオランダ通信

第1回

本誌ではたびたびオランダという国を取り上げ、農業視察ツアーも行なってきた。九州並みの面積ながら世界2位の農産物輸出国であり、トマトをはじめ、農産物の収量が高いことでも知られる先進国農業の象徴ともいえる存在である。そのオランダに滞在するうち、同国の農業に魅了された紀平真理子さんが日本人の視点でオランダ人とオランダ農業の実像を描く。

## プロフィール

1985年、愛知県名古屋市生まれ。南山大学外国語学部スペインラテンアメリカ学科卒業後、コンタクトレンズメーカーで国内・海外業務に携わる。夫の駐在帯同で2011年12月からオランダのアムステルダム市に在住。父の家庭菜園を見て農業に興味を持っていたこともあり、すべてにおいて実利的で交渉上手なオランダ人によるオランダ式農業に魅了されたという。

オランダの食卓は決して豊かではない。ではなぜ、食にこだわらないオランダで農業ビジネスが成功したのだろうか？

オランダは、「食にこだわることは卑しい」とされているプロテスタント信仰のため、温かい食事は1日に1回のみ。基本的には朝食も昼食もチーズとハムのサンドイッチのみだ。よく電車や自転車に乗りながらサンドイッチを食べているオランダ人を見かける。夕食は肉、ジャガイモと野菜で、同じものを毎日食べる人もいる。また、新たな味付けや食べることがない食材を拒否するオランダ人も少なくない。以前、オランダの家庭料理を作ってもらったことがあるが、肉とバターが多さに驚きを隠せなかった。それに加えて、現在は女性の社会進出が進み、家庭料理がさらに簡素化している。「おふくろの味はAH（オランダ最大手のスーパーマーケット）の味」と揶揄している友人もいるほどだ。

先日、オランダ人から「農業に携わりたいなら、交渉力と語学力を鍛えて人脈を作りなさい」というアドバイスを受けた。さらに、「オランダ式農業では契約締結のための交渉が大切。そこが日本人の弱みでしょ」と彼女はすべてを見透かしているように微笑んだ。東インド会社時代か

ら続くオランダ人の商人魂を侮ってはいけない。できれば敵に回したくない相手である。現代では商人魂のほか、独創的なIT技術、高い情報収集力と新しいものをすぐに取り入れるフットワークの軽さから農業はもろろんのこと、建築デザインやロボット工学などさまざまな分野で世界をリードしている。

また、オランダ人のメンタリティーは日本人と180度異なる。日本人は人の気持ちを第一に考え、義理と人情を大切にす人間味あふれる国民性だ。一方、オランダには「行間を読む」「顔色をうかがう」という行為は存在しない。物事を常に客観的に観察し、論理的に分析する。効率良く物事を進めるためだ。それを成し遂げるために、空港から病院、警察での被害届提出までもシステムで管理されている。巨大オートメーション農園は彼らが誇る優秀なシステムの一つであるに違いない。

食に関しても同様に極めて客観的だ。「生きるために食べる」ため、食への思



1365年から続くアルクマールのチーズ取引市



オランダの民族衣装



長崎の出島に出入りしてきたオランダ人名簿（オランダ国立美術館蔵）



オランダの家庭料理、Gehaktballen（ミートボールをバターで揚げたもの）とポテトグラタン

い入れが希薄といえる。だからこそ、農作物を「商材」と割り切ることができ、思い切ったビジネス展開を行なえるのではないだろうか。また、オランダ人は革新的な取り組みやビジネスを許容し、誇りに思うことから、新しい方法で栽培された野菜も同様に受け容れたに違いない。オランダ人はビジネスをするために生まれてきた、といっても過言ではない。そんなオランダ人が「これからは注目する」と言っている。次はどんなサプライズが待っているのかと私はワクワクしている。オランダ農業の今後の展開からまだまだ目が離せない。